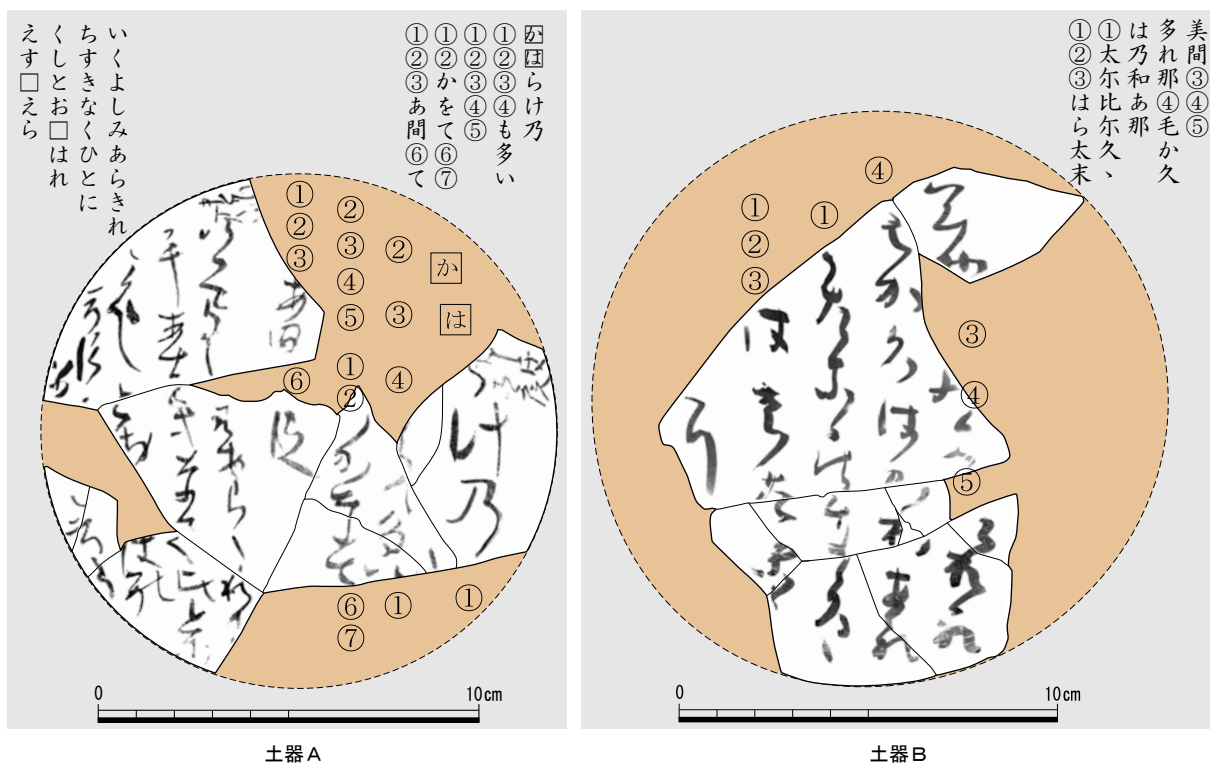


## 西三条第跡出土の遺物 3

### 仮名墨書土器

<http://www.kyoto-arc.or.jp>

(公財) 京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館



土器A

土器B

**仮名墨書土器が出土** 2011年に実施した平安京右京三条一坊六町跡（西三条第推定地）の発掘調査では、仮名を墨書した土器が多数出土して注目されました。平安京跡でこれほどまとまって仮名を墨書した土器の出土例はなく、解釈をめぐるのは今も各方面から熱い視線が注がれています。

**土器A** 土師器皿の外面に9行にわたって仮名が墨書されており、出土品の中では文字数が多い個体です。字体が連続しないため草仮名とみる意見もありますが、平仮名が書かれた確実な資料でもあります。右半分の字体が大きく、4行目の中央で途切れることから、内容がいったん途切れたとみられ

ます。ここには和歌が書かれていたとみて、五・七・五・七・七で割り付けてみると上図のようになります。1行目の「□□け乃」ですが、「け」の前の文字を「ら」とみて「かはらけ乃」と読むと、この土師器皿そのものを指します。2行目以下は欠落が多いため文意は通じませんが、「かはらけ」の語句を含む和歌が書かれていたとみられます。

左半分は字体が小さく間隔も狭くなっています。内容はよくわかりませんが、6・7行目は「好きな人憎しと思はれ」と解釈されています。

なお、かはらけに和歌を書いてやり取りする場面は『うつほ物語』

では「祭の使」「蔵間・上」「菊の宴」「蔵間・下」「国譲・中」に散見できます。また『伊勢物語』第69段では「女さかづき方よりいだす杯の皿ついまつに、歌を書きいだしたり。取りて見れば（和歌あり・省略）と書きて末はなし。その杯の皿ついまつに、続松の炭して、歌の末を書きつく。」とあり参考になります。

**土器B** 土師器杯の内面全体にわたって墨書しており、土器F・Aに次いで文字数が多い個体です。太い崩し字で書かれ、字体の大きさも揃っています。先と同じ方法で割り付けてみると矛盾なく収まるため、こちらも和歌が書かれていた可能性があります。3行目後半の「尔久」を「憎く」と読む

と、土器A「人憎しと思はれ」と同じ意味になります。

**土器C** 土師器杯の外面に4行以上墨書されており、土器A・Bのように全面に書かれていた可能性があります。字体は細く優雅で、上下は連続します。

**土器D** 土師器杯の外面に墨書しますが、写真上半には墨書はみられず、下半のみに書いたようです。字体は連続しません。

**土器E** 土師器皿の口縁部外面に1行5文字の墨書があり、「かつらきへ」と判読されます。「かつらきへ」は神楽歌「朝倉」にある一首とみられます。

**土器F** 土師器高杯の杯部内面と8角形に面取りされた脚部外面にびっしりと細かな文字が書かれています。字体は上から下に連続する「連綿体」で、より平仮名に進化した姿が見られます。

**土器G** 黒色土器碗の底部外面に「は」と大きく墨書しています。「いろは」の「は」であり、3番目の意味があるとみられます。土師器以外で平仮名が書かれた唯一の個体です。

『古今和歌集』引用か 土器Aの左半分には『古今和歌集』にある和歌の一部が記されたとする見解があり、それによれば、5行目「いくよしみあらきれ□」と6行目頭「ち」を「以久与し毛あらし和可(み)乎」と読み、これを『古今和歌集』巻第18「雑歌下」934の「幾世しもあらじわが身をなぞもかく海人の刈る藻に思ひ乱るる」に同じと理解します。ここにある「海人の刈る藻に」を含む歌は、東北

の海辺の景色を表したものですが、同じ『古今和歌集』巻第15「恋歌5」807には「海女の刈る藻に住む虫のわれからと音をこそ泣かめ世をば恨みじ」があり、この歌は『伊勢物語』第65段にも納められています。また『伊勢物語』第57段には「恋ひわびぬ海人の刈る藻に宿るてふわれから身をもくだきつるかな」など、類似する歌も納められています。

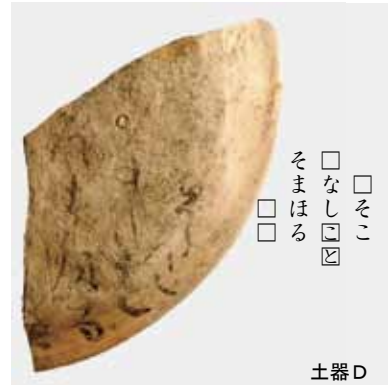
在原業平と交友か 『伊勢物語』は「昔、男ありけり」で始まる歌物語で、主題の男は在<sup>ありわらのなりひら</sup>原業平(825～880年)を指すとされます。在原業平は『古今和歌集』では六歌仙の一人に含まれる著名な歌人です。第9段では失意のうちに都を離れ東国を流浪し、第81段では陸奥塩竈の景色を愛で、第82段では摂政藤原良房<sup>ふじわらのよしふさ</sup>(804～872年)が外孫の清和天皇を即位させたことから失意にあつた<sup>これたか</sup>惟喬親王を慰めます。

在原業平と西三条第の主、藤原<sup>よしみ</sup>良相(813～867年)の長子藤原<sup>つね</sup>常行<sup>ゆき・ときつら</sup>(836～875年)との間に交友があったことは、『伊勢物語』第77・78段の記述や藤原常行が亡くなった貞観17年(875)に追贈勅使として西三条第に派遣されていることから推定されます。反良房派であった業平は「応天門の変」(866年)後に衰退する良相家に親近感をもっていたと考えられます。当然、西三条第に招かれた際には和歌のやりとりがあったことでしょう。今回出土した仮名墨書土器には、そのような歴史性が秘められているのではないのでしょうか。

(丸川義広)



土器C



土器D



土器E



土器F



土器G